卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	日本人の若者にとってスピリチュアルとは何か
氏名	緑川葵子
メジャー	宗教学
マイナー	ビッグヒストリー

（要旨）

ISSP 国際比較調査「宗教」（2018）によると、日本で一番信仰されている仏教の 18 歳から 39 歳の信仰度は 17%であることから、日本人の若者の多くは「無宗教」を自認していることがわかる。國學院大學日本文化研究所（2022)による「第 13 回学生宗教意識調査」では、若者はスピリチュアルに対し「怪しさ」と「精神的な深み」の二極化した認識を持っていることが明らかになっている。この矛盾した認識にはどのような背景があるのか分かっていない。そこで本研究では、若者におけるスピリチュアルに対する「認識」「実践」「動機」を明らかにすることを目的とした。調査にあたり、2024 年 11 月から 2025 年 11 月にかけて、20 代の日本人 9 名を対象に半構造化インタビューを行った。結果として、9 名全員がスピリチュアルに対して「不信感」を抱いていることが判明した。その一方で、「安心したい」「何かに縋りたい」という気持ちが同時に存在していることも確認できた。彼らにとって、伝統的習慣は安全に行えるスピリチュアルな実践として活用されている。さらに、スピリチュアルな実践を能動的に行うか否かは、「自己効力感」が影響していると考察した。自己効力感が高い場合、不安や孤独を感じることが少なく、スピリチュアルに頼る必要がない。だが、自己効力感が低い者は、何かに縋りたくなり、不安の解消や少しの安心を得るため、能動的にスピリチュアルな実践を行う傾向があった。また、スピリチュアルが若者に多く取り入れられる社会的要因として、「不確実性」と SNS による「情報の利便性」の影響があると推測した。以上のことから、日本人の若者にとってスピリチュアルは、一時的な不安を解消することのできる「心の安定剤」なのだと結論づけた。

（指導教員の推薦のコメント）

本論文は、現代日本の若者が持つ超越的なものへの心理構造を、「宗教」ではなく「スピリチュアル」という切り口から鮮やかに描き出した、独創性と完成度を兼ね備えた質的研究である。調査手法においては、9 名の協力者に対し各 1 時間におよぶ濃密な半構造化面接を実施しており、安産祈願や占いの取捨選択といった具体的なエピソードから、内容に極めて厚みを持たせている。分析面ではグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を精緻に適用し、膨大な発話データから「認識・動機・実践」の構造を的確に抽出した。特に、若者の「不信感を抱きつつも利活用する」というアンビバレントな心理を、「心の安定剤」というキーワードで言語化した洞察は極めて鋭い。対象者の属性に偏りがある点には慎重な解釈を要するが、学部卒業論文として質・量ともに卓越しており、後進の模範となる一編として高く評価し、優秀論文に推薦する。